様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：５０１０３
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１２７９９

研究課題名（和文）現象学における包括的カント解釈・批判史の構築と現象学的な超越論的哲学の体系的解明

研究課題名（英文）Historical reserch of the Kant-interpretations in phenomenological tradition and systemtic investigation of the phenomenological transcendental philosophy

研究代表者
池田　裕輔（Ikeda, Yusuke）

釧路工業高等専門学校・創造工学科・講師

研究者番号：８０７４８５２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現象学の伝統を代表する哲学者であるエトムント・フッサール、マルティン・ハイデガー、オイゲン・フィンクのカント解釈・批判を解明し、その成果に基づいて、それぞれの現象学者における超越論的哲学の理念を体系的に明らかにした。具体的には:
（１）カント的なアプリオリおよび綜合概念へのフッサールの批判が彼の現象学的な超越論的哲学の理念の形成に対して持つ意味を明らかにした。（２）ハイデガーの「存在論的なカント解釈」と超越論的哲学としての基礎的存在論の理念形成の関係を解明した。（３）フィンクにおける「宇宙論的カント解釈」と彼の「世界の現象学」の展開の関連を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果としては、第一に、フッサール、ハイデガー、フィンクといった現象学の伝統を代表する哲学者における超越論的哲学の理念の形成と彼らのカント解釈・批判の関係を示した点が挙げられる。
第二に、このような研究成果に基づくことで、現象学の伝統における超越論的哲学の展開をより大きな哲学史的文脈に位置づける包括的作業の基礎を築いた点が成果として挙げられる。特に、第二の点は、国内外を問わず研究が手薄な領域であることから、その学術的・社会的意義は強調されるに値するものだといえる。

研究成果の概要（英文）：This study aims at clarifying systematically the basic ideas of transcendental philosophy in phenomenological tradition, especially in Edmund Husserl, Martin Heidegger and in Eugen Fink, in consideration of their so called "phenomenological interpretations" of Kant's Critique of the Pure Reason. By focusing on their respective phenomenological Kant-interpretations and their criticism of Kant's philosophy, the study argues respectively (1) that Husserl's criticisms of some basic conceptions in Kant's transcendental philosophy (such as a priori or synthesis) is relevant for a formation of his phenomenological transcendental philosophy as such, (2) that Heidegger's "ontological Kant-interpretation" offers us a meaningful perspective from which his transcendental oriented idea of fundamental ontology could be systematically elucidated, (3) that Fink's "cosmological Kant-interpretation" has a decisive meaning for a formation of Fink's so called "phenomenology of world".

研究分野：現象学

キーワード：現象学　超越論的哲学　フッサール　ハイデガー　フィンク　カント　純粋理性批判　形而上学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

【研究の背景】
本研究の背景には、先行研究では、現象学の伝統におけるカント解釈・批判の包括的解明作業が十分にはなされておらず、このような研究状況が現象学の伝統全体の哲学史的位置づけおよびその現代における哲学的意義を見通しにくいものにしている大きな要因のひとつであるという問題意識があった。
【その説明】
具体的には、これまでの現象学研究は、フッサールにおけるカント・新カント派との対決の実証的研究(I. Kern: *Husserl und Kant* (1964), D.Pradelle, *Par-delà la révolution copernicienne* (2012))**やハイデガー思想におけるカント解釈の意義の解明**（H.Declève, *Heidegger et Kant* (1970)）**に終始することが多かった。このような先行研究の状況は、現象学の伝統全体の哲学史的位置づけ、そして、この伝統が現代において持ち得る哲学的意義を見誤らせ、不明瞭にしている**（cf. T.Sparrow, *The End of Phenomenology*　(2014)）**大きな要因のひとつであると考えられる。このことから、本研究課題「現象学における包括的カント解釈・批判史の構築と現象学的な超越論的哲学の体系的解明」が構想されるに至った。**

２．研究の目的

【研究の目的】
本研究は「現象学におけるカント解釈・批判史」の包括的解明を通じて、現象学における「超越論的哲学」の多様な展開に対して体系的観点から見通しを与えることを目的とするものであった。
【その説明】
現象学の伝統においては「対象が認識に従う」とするカントの有名な「コペルニクス的転回」が転倒され、「対象そのものの与えられ方」の分析（「志向的相関性」の分析）に依拠する新しい超越論的哲学の多様な可能性が切り拓かれた（これに基づき現象学的な「認識論」、「存在論」や「形而上学」など様々な構想が展開される）。本研究課題はカント『純粋理性批判』の各主要部にむけられた現象学の側からの解釈・批判を包括的に解明することで、現象学における反カント的な「超越論的哲学」の構想とその哲学的意義を体系的に明らかなものとすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、下記の三つの課題群を設定、その解明をおこなうことで上記の研究目的の達成を目指したものである。
（課題１）フッサール：「超越論的感性論」の再構築と「現象学的な認識論」
現象学運動の創始者であるエトムント・フッサール（1859－1938）は『純粋理性批判』の「超越論的感性論」を中心としたカント解釈・批判に取り組み、現象学的な認識論の構築に従事している。このことからフッサールの「認識論的・感性論的カント解釈・批判」の解明を通じてカントと現象学の「超越論的哲学」の差異を体系的に明らかにする。

（課題２）ハイデガー：「超越論的分析論」の再構築と「現象学的な存在論」
現象学の存在論的展開を図るマルティン・ハイデガー（1889－1976）は『純粋理性批判』の「超越論的分析論」を中心としたカント解釈・読み変えに集中し、現象学的な存在論の構築に従事している。このことからハイデガーの「存在論的・分析論的カント解釈・批判」の解明を通じてカントと現象学の「超越論的哲学」の差異を明らかにする。

（課題３）フィンク：「超越論的弁証論/方法論」の再構築と「現象学的な形而上学」
現象学の形而上学的展開を図るオイゲン・フィンク（1905-1975）は『純粋理性批判』の「超越論的弁証論」および同「方法論」の解釈・批判に取り組み、「遊び」や「世界」概念を中心とする独自の現象学的な形而上学の展開に従事している。このことからフィンクの「形而上学的・弁証論的カント解釈・批判」の解明を通じてカントと現象学の「超越論的哲学」の差異を体系的に明らかする。

４．研究成果

本研究の成果は次の２点に大別できる：
(成果1) 本研究の第一の成果として、当初の計画通り、現象学の伝統における超越論的哲学の多様な理念の展開に対してこの伝統内で繰り広げられた多様なカント解釈・批判が決定的な意義を持つことを示した点が挙げられる。すなわち、現象学の伝統における包括的なカント解釈・批判史の構築なしには、現象学的な超越論的哲学の展開を充分には解明できないということを本研究の諸成果が強く示唆している点に、第一の成果が集約される。
・具体的には、現象学の伝統を代表するフッサール、ハイデガーおよびフィンクがおこなっているカント解釈・批判が、それぞれ、カント『純粋理性批判』の「超越論的感性論」、「超越論的分析論」、「超越論的弁証論」の批判的読解・解体作業を中心として展開されたものであり、彼らは、それぞれ、自身のカント解釈・批判を手引きとすることで現象学的な「超越論的哲学」の理念を形成していること（この傾向は、特にハイデガーおよびフィンクにおいて顕著である）がほぼ研究計画通りに明らかにされた。
(成果2) 当初の研究計画に含まれていなかった第二の研究成果として、現象学の伝統における「超越論的哲学」の諸理念が「形而上学（の基礎付け）」というプログラムと密接に連関していることが、本研究の実施を通じて、明確化された点を挙げることができる。具体的には、以下の諸点が明らかにされた：
・フッサールは超越論的現象学を標榜する以前の時期から、「学的形而上学」とその基礎づけを自身の哲学が果たすべき最重要課題のひとつとしており、この点を考慮することで、フッサールにおける「超越論的現象学」の立場への移行の動機と意義を充分に理解可能なものとすることができることが明らかにされた。
・ハイデガーの『カントと形而上学の問題』等におけるカント解釈は、『存在と時間』、また、『現象学の根本諸問題』での「超越論的学としての基礎的存在論」の立場の「徹底化」である「現存在の形而上学」および「メタ存在論」という彼独自の理念の展開と直接的にかかわるものであり、この限りで、ハイデガーの「存在論的・分析論的カント解釈・批判」は、彼独自の「形而上学」の理念との連関なしには、その意義を充分に解明することができないものだということが明らかにされた。
・また、「超越論的弁証論」を中心とした解釈を展開するフィンクは、カントの世界概念を伝統的な形而上学が陥っていた「世界忘却」からの脱却であるとし、その形而上学的（また、形而上学史における）意義を最大限に評価したうえで、独自の宇宙論的現象学の立場を樹立している点が明らかにされ、その内実が解明された。

なお、研究代表者は、今後、上記、２点の成果をもとに、現象学の伝統における超越論的哲学の理念の展開を哲学史的・体系的両観点から、より包括的に研究・検討する作業に従事する予定である。

以下、年度ごとにわけて、研究成果の概要を示す。
(初年次の成果) 初年次は、当初は、上記の課題１（フッサール：「超越論的感性論」の再構築と「現象学的な認識論」）の作業に従事する予定であったが、結果として、課題１、課題２（ハイデガー：「超越論的分析論」の再構築と「現象学的な存在論」）および課題３（フィンク：「超越論的弁証論/方法論」の再構築と「現象学的な形而上学」）の作業を並行しておこなうこととなった。
・課題１に関しては、主にフッサールにおける超越論的哲学およびカント解釈批判の鍵となる、現象学的な「感性」概念と志向性概念の関連の解明をおこなった。
・当初、第２年次に実施予定であった課題２（ハイデガー：「超越論的分析論」の再構築と「現象学的な存在論」）に関しては、ハイデガーのカント解釈に関する先行研究の読解および主著『存在と時間』における超越論的哲学の理念解明のための文献読解作業に着手した。
・最終年次に実施予定であった課題３（フィンク：「超越論的弁証論/方法論」の再構築と「現象学的な形而上学」）に関しては、フッサールとフィンクの超越論的哲学の理念の解明に関する論文の出版や、フィンクのカントにおける「超越論的弁証論」解釈を扱う論文の投稿準備をおこなったが、結果として、最も研究が進展し、当初、最終年次に予定していた研究の大部分（フィンクにおける「超越論的弁証論」解釈・批判に関する研究）を完了した。

(第2年次の成果) 第２年次は、研究開始当初の計画では課題２（ハイデガー）の作業に集中する予定であったが、結果として、課題１（フッサール）に関する作業を並行しておこなうこととなった。
・課題１に関する初年次以来の研究の進展に伴い、フッサールとカント両者の超越論的哲学における「形而上学」の位置づけの相違が重要であることが判明したことから、第２年次はカントとフッサールにおける「形而上学」の理念と内実を解明するための文献読解作業（「フッサールにおける超越論的哲学と形而上学の関係解明」）に本格的に着手した。
・課題２に関しては、ハイデガーのカント解釈に関する先行研究の読解および主著『存在と時間』における超越論的哲学の理念解明のための文献読解作業に従事した。

・当初、最終年次に実施予定であった課題３（フィンク）に関しては、前年度段階で、研究計画の大部分を既に完了したため、複数の論文投稿の準備、また、査読対応等をおこなった。

（最終年次の成果）最終年次は、研究開始当初は課題３（フィンク）に集中する計画であったが、上述のように、課題３に関しては、初年次および第２年次に予定していた研究の大部分を終了したことから、結果として、主に課題１および課題２から派生した発展的課題の研究に従事した。具体的には、前年に引き続き、課題１（フッサール）の実施を通じて新たに必要性が明らかとなった発展的研究課題（「フッサールにおける超越論的哲学と形而上学の関係解明」）および課題２（ハイデガー）に関する研究作業を継続したうえで、課題３に関連する研究にも従事した。
・課題１とその発展的課題に関しては、『論理学研究』公刊以前の時期から超越論的現象学への転換以前の時期におけるフッサールの形而上学理解を同時期の講義草稿群を主な資料として整理し、また、『デカルト的省察』等、公刊著作での形而上学に関するフッサールの言及を、彼の哲学史理解との関係から解明した。
・哲学課題２に関しては、ハイデガーのカント解釈とその独自の超越論的哲学（「超越論的学」）の理念の内的連関の解明作業を継続し、また、その研究を通じて明らかとなった『存在と時間』での超越論的なプログラムとしての基礎的存在論と同著公刊直後の時期からハイデガーが取り組む独自の形而上学の理念の展開（「現存在の形而上学」および「メタ存在論」）の内的連関およびその意義を発展史的に解明する新たな研究課題に着手した。
・また、課題３に関しては、フィンクにおけるカントの「超越論的方法論」の批判的受容に関する研究に従事した。

なお、上記の研究成果群の一部は既に公表済みであるが、今後、更にその成果発信を継続的におこなう。また、本研究成果は、2023 年度に採択された科学研究費助成事業基盤研究(C)「現象学の伝統における超越論的哲学の展開に関する包括的研究の構築」（23K00044　研究代表者：池田裕輔）の背景・基礎をなすものである。この限りで、本研究は、今後、上記の研究を通じてより包括的な仕方で発展的に深化・展開されるものだといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Yusuke Ikeda	４．巻 1
２．論文標題 Eugen Fink ’s Transcendental Phenomenology of the World	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Husserl, Kant and Transcendental Phenomenology	６．最初と最後の頁 455～478
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110564280-021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yusuke Ikeda	４．巻 1
２．論文標題 Der phaenomenologiesche Horizontbegriff als Grundbegriff des oekologischen Denkens	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Phaenomenologie und Oekologie	６．最初と最後の頁 49～67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yusuke Ikeda	４．巻 2022-2
２．論文標題 Fink und Kants Dialektik	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Phaenomenologische Forschungen 2022-2: Eugen Fink und die Phaenomenologie	６．最初と最後の頁 71～89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.28937/9783787343478_6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yusuke Ikeda	４．巻 1
２．論文標題 Warum es die Welt (nicht) gibt. Eine phaenomenologische Antwort. 194-205	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Phaenomenologie und spekulativer Realismus.	６．最初と最後の頁 194～205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計5件

1．著者名 ハイデガー・フォーラム	4．発行年 2021年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 640
3．書名 ハイデガー事典	

1．著者名 Yusuke Ikeda, Graham Harman, Frank Pierobon, Florian Forestier, Herman Inverso, Irene Breuer, Guillermo Ferrer, Nicolas Garrera-Tolbert, Sadra Lehman, Stanislas Jullien, Alfredo Vernazzani, Alexander Schnell, Peter Gaitsch, Bianka Boros, Claude Romano, Thomas Arnold, Arjen Kleinherenbrink, Aengus Daly	4．発行年 2021年
2．出版社 Koenigshausen & Neumann	5．総ページ数 248
3．書名 Phaenomenologie und spekulativer Realismus. Phenomenology and Speculative Realism. Phenomenologie et realisme speculatif	

1．著者名 Yusuke Ikeda, Benjamin Kaiser,, Fausto Fraisopi, Karel Novotny,, Kwok-ying Lau, Ignacio Quepons, Evrim Kutlu, Roberta Guccinelli, Jean JOse Garrido Perinan, Tae-Hee Kim, Seongha Hong, Hans Rainer Sepp	4．発行年 2020年
2．出版社 Koenigshausen & Neumann	5．総ページ数 201
3．書名 Phaenomenologie und Oekologie	

1．著者名 Yusuke Ikeda, Claudia Serban, Iulian Apostolescu, Inga Roemer, Corijn van Mazijk, Daniel De Santis, Dominique Pradelle, Alexander Schnell, Ovidiu Stanciu, Steven Crowell, Natalie Depraz他	4．発行年 2020年
2．出版社 De Gruyter	5．総ページ数 537
3．書名 Husserl, Kant and Transcendental Phenomenology	

１．著者名 川瀬 雅也、米虫 正巳、村松 正隆、伊原木 大祐	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 350
３．書名 ミシェル・アンリ読本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関